

困難状況に陥っている婦人科がん患者を
支える看護実践上の指針
— 気になりつつも関わりを模索していた
患者への看護過程の分析より —

大野綾 (基礎看護学)

【キーワード】 婦人科がん, 困難状況, 看護過程,
その人らしさ, 実践上の指針

本研究の目的は、困難状況に陥っている婦人科がん患者が、その人らしく最期まで回復過程が進むように持てる力を発揮できることにつながる看護実践上の指針を抽出することである。

研究対象は、気になりつつも関わりを模索していた婦人科がん患者への自己の看護過程である。

研究方法は、今ここで看護が必要だと思い関わったなかで、患者のよい変化につながったと思われる場面と看護の方向性が定まった場面を再構成した。その【関わりの意味】と【看護者の認識と表現の特徴】を研究目的に照らして分析し、場面における【困難状況の特徴】と【行動指針】を抽出した。次に、各事例の対象特性と困難状況の共通性を検討し、実体面では、[生命維持に直接関わらない器官の障害であるため、命のおびやかしが静かに進む] 認識面では、[想定外の体の状態の現実を突きつけられることで心のありようも刻々と変化し、成熟期の女性ならではの感情のゆれが生じやすい] 社会関係面では、[患者と家族と医療者の思いにズレが生じやすい] という特徴が浮き彫りになった。その特徴をふまえて、4事例8場面から得られた14の行動指針の共通性と相異性を検討し、困難状況に陥っている婦人科がん患者を支えることにつながる看護実践上の指針を以下の7指針抽出することができた。

- 1 患者の反応の意味がわからず日常生活のケアがとどこおっている時は、その人らしさを大切にし、患者のタイミングに合わせて、快の刺激が届くように関わる。
- 2 患者の言葉そのままの体の状態を捉えるのではなく、患者の今おかれている状態を患者の位置から捉えられるよう関わる。
- 3 患者の選択が消耗につながるかを判断した上で、その選択までに患者のたどってきた過程を知る。そして、その人らしさを大切にし、患者が快を感じられるケアを提供しながら時を待つ。
- 4 支えられることへの感情のゆれをしっかりと受け止めつつ、それを表出できるよう関わる。そして、これまで家族とたどってきた過程を想起できるよう関わる。
- 5 子どもに対する気負いから解き放たれる心持ちになれるよう、子どもに育まれている力を母として実感できるよう関わる。
- 6 患者の願いの実現にむけて、生きる力だけでなく生活する力・人と関わる力・支える力をアセスメントする。そして、患者と家族と医療者の思いのズレを調整しながら関わる。
- 7 個別な家族の力に目を向け、家族だからこそできることを見出し、実現できるよう関わる。